

新人女性社員によるトマト生産が快進撃。男性中心の職場に大改革を起こす！

株式会社しゅん・あぐり

※2018年3月現在

代表者名	臼倉 正浩	資本金	10百万円
設立年	2006年5月2日	売上高	52百万円(2017年4月期)
事業内容	生産(小松菜、トマト、キャベツ)	経営規模	畑7ha、生産施設8,000㎡
従事者数	28人(うち女性11人。女性内訳:一般職1人、常勤パート10人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係(休憩室・屋内・野外トイレ)		



経営概況

埼玉県南東部に位置する八潮市は、日本有数の小松菜の名産地。ここに本社を置く株式会社しゅん・あぐりは、小松菜やキャベツ、トマトなどをメインに生産・販売する農業法人である。代表の臼倉正浩氏は、地元農家の長男として生まれ、大学卒業後に両親のもとで就農。約10年間従事した後に独立し、別の農地で2006年に農業法人を立ち上げた。

現在の主な取引先には関東近郊にチェーンを持つ地場スーパーがあり、売場の一角で農家直送コーナー(委託販売)を行っている。売場の彩りとして欠かせないトマトは、以前は社外の生産者が

ら仕入れていたが、納品数や品質の安定化を図るために2016年より自社生産を始めた。これがヒットとなり、初年度のトマトの売上は800万円を超え、2017年度4月期の売上高も前年の約700万円増の5,188万円に上昇。トマトの生産は、農学部出身で農機メーカーから2016年に転職した20代の女性社員に全面的に任されており、農作業は初心者だったというものの入社1年目から快進撃を続けている。

1. 経営者の理念・意識改革

トマト担当の加藤さおり氏は2016年4月に入社。大学在学中はトマトの研究を行い、就職した農機メーカーでは農場勤務を希望したが違う部署に配属となり、そこで5年勤めた後、同社に転職したという経緯がある。それまでは社員といえば男性のみで、彼女の入社後に女性が働きやすい環境を徐々に整えていった。そのひとつが働き方の改善。それまでは、男性従業員は休みがあっても、農場が気になって休日出勤をしてしまう傾向があったという。しかし、それでは女性従業員が休みをとりにくい。そこで就業規則の見直しとホワイトボードで勤務時間を管理するよう変えた。



白倉氏が両親から独立して農業法人を立ち上げた時、これまでの農家の働き方を改善したいという思いがあったという。「僕らの父親世代の農家の“休むのは悪”という考えは古い。従業員がきちんと休める環境でなければ農業法人としての成長はない、と以前から考えていたので、いいきっかけでした」と、白倉氏。育児介護休業規程などを盛り込んだ就業規則の見直しは2018年1月に完成した。ほかにも女性専用のトイレの設置や、年に1度の大掃除など、作業場の環境が大きく変わった。

2. 女性が活躍できる環境づくり

加藤氏が担当するトマト栽培施設は、生産者がひとりで管理できる平均的な広さの15aの5連棟ハウス。夏季栽培用の無加温ハウスと冬季栽培用の暖房設備が整ったビニールハウスの2つを導入することで農閑期を減らして売上を確保し、通年雇用を可能にした。こうした配慮もあってトマトの生産量が昨年よりも増え、売上に貢献している。

加藤氏以外にも大活躍する女性スタッフがいる。売場のディスプレイから納品交渉まで、販売面を一手に担当する配送兼営業担当の松橋かおる氏だ。10年以上勤務するベテランで、子育てが一段落したのを機にパート従業員から準社員に昇格している。「取引先をまわっているいろいろな情報をキャッチできるので、商品価格の設定は彼女を中心にしています。時には売場で直接お客さんから話を聞いて、商品の評価をフィードバックしてくれることも」と白倉氏。トマト売り場は、加藤氏の顔写真入りポップ付きで、味の良さだけでなく女性が生産していることもアピール。お客様からの味の評判が良く、品質の高さで取引先からも信頼度が高い。一部のスーパーでは、当社の直売コーナー以外にも常設スペースが設置されるよ

うになり、野菜売り場の定番商品として加藤氏のトマトが販売されている。

3. 女性が働きやすい環境の整備

生産部門では10名の女性パート従業員が勤務。女性専用トイレにはウォシュレット付きを採用したほか、作業場のリフォームを行った。作業効率向上だけでなく、男性スタッフが職場をもっときれいにしようという意識改革にもつながっているという。また、以前は決まった休憩時間を設けていなかったが、加藤氏と松橋氏の2人の女性の意見により、休憩時間を設定した。そんな女性の働きやすさを考慮した取り組みから女性パート従業員の定着率が上がり、女性パートたちの紹介で入社したパート従業員もいる。職場の環境も、男性スタッフが多かった時代に比べると会話が増え、和気あいあいとした明るい雰囲気になった。

「社長にはなんでも相談できる」と話す加藤氏。これまでもトマト栽培の新技術や設備の投入時には、積極的な意見交換を行ってきた。白倉氏も彼女がリーダーとして会社を引っ張る存在になることを期待しており、将来有望な若き女性農業者の活躍を応援している。

審査委員の声

大消費地が目の前にある埼玉県八潮市。新規事業のトマト部門を任された新人加藤さんが、配送兼営業担当の松橋さんのサポートもあって利益を上げ、これまで男性社会で休みにくく働きにくかった職場を変えていく、変革のテンポのよさ。社員がインターネットで経営状況を共有し、就業規則は柔軟に変えようという素地のあるところに、コミュニケーション能力の高い専門知識のある女性が入ることで、制度整備はすすむという好事例。